INTERVIEW：インタビュー

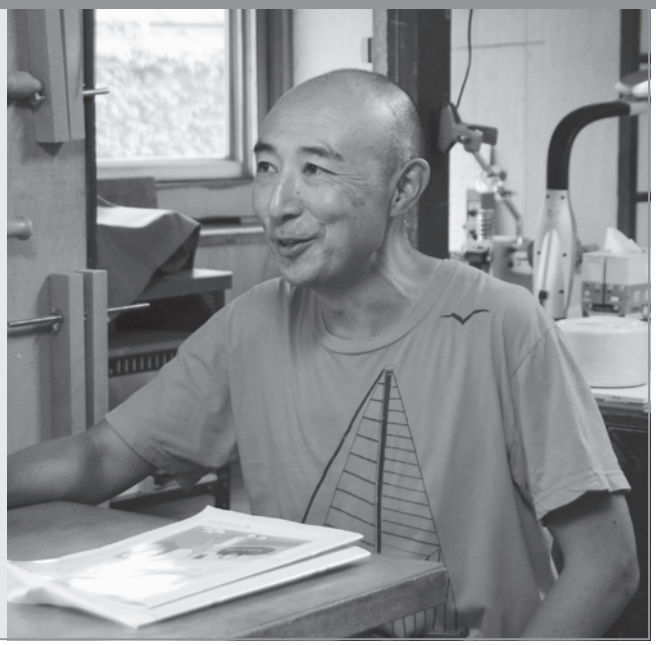
製本アーティスト

山崎 曜さん

東京・世田谷にて製本アーティストとして活動されている山崎曜さんのアトリエにて，製本をはじめたきっかけ，製本に対する取り組みと想いなど，幅広く語っていただきました。インタビューの合間に，次から次へと出てくる想像力豊かな作品に，圧倒されてしまいました。

＊表紙裏「リブラギャラリー」にカラー写真を掲載しています。

（聞き手・構成：鈴木 啓太，小林 英了）



── 製本アーティストとして活動するようになったきっかけを教えてください。

もともと本が好きで，できれば絵本作家か本の挿絵を描く仕事がしたいと考えました。学生時代には絵本やイラストのコンペに応募し，卒業後は翻訳の絵本をやっている出版社に就職しました。

このころ，ちょうどパソコンが導入されてきた時代で手作業が少なくなってきていましたが，私はやはり手作業で物を作りたいと感じていて，カルチャーセンターで工芸製本の教室に通い始めました。その時，講師の先生から，手伝ってくれる人を探している製本家がいるという話をもらい，出版社を辞めてその人の見習いになりました。

── そもそも工芸製本というのは，どういうものなのでしょうか。

工芸製本というのは，機械化以前のヨーロッパで発達した，伝統的技法による製本です。フランスでは，フランス革命後に勃興したブルジョワ階級が，愛書家協会を作ったり，ひいきの製本工房にオリジナルな1冊だけの製本を作らせたりして，新たなフランス文化の創造をめざしてお金をつぎ込みました。それが20世紀半ばまで栄えました。日本には，明治時代に工業化された製本技術が入っただけで，工芸製本は入ってきませんでした。

フランスの愛書家の世界では，革装の本を本棚に並べてみせるということがたいへんな楽しみとなっていたようです。

── 法律事務所でも，応接室に沢山本を並べたりします。

アメリカでは自分のイメージを表すものとして，自分の写真の背景に本をたくさん並べて，「自分はこういう人間なんだ」ということを見せることが，非常に価値があるとされていると聞きました。そこで，手で製本された本が使用されるのです。そういった本を作る製本家も，社会的地位が高い職業とみなされているそうです。

私は，そういう権威主義があまり好きではないのもあり，工芸製本とは少し違った作品を製作するようになりました。また，私の作品は，製本の技術を使っていながら，本でないものも多いため，一昨年から「手工製本家」から「製本アーティスト」に肩書きを変更しました。

── 作品を拝見しますと，確かに本の形はしていますが，非常に多様です。

いろいろなことをやっています。たとえば，この作品は壊れてしまった辞書を直すついでに，革の表紙を付け直したのですが，バック型にもなるし，壁に掛けておくこともできます。（リブラギャラリー写真4，5，6）

── いわゆるリサイクルの一種でしょうか。

電子辞書や電子書籍が広く利用されて，本の，情報を載せるためのものという役割はある意味終わっていると思います。こんなふうにインテリアとして，昔こういうので引いていたよとか，物自体としてなら残っていくのかな，と考えています。

紙の本には，機能としての良さも有ると思います。私は便利だから電子書籍もよく使っていますが，しばしば自分がどこを読んでいるのか分からない感じになってしまいます。本の中のどこを読んでいるのか，もう終わりに近いのか，あれがどこに書いてあったのかとかそういう感覚が，具体的にはつかめない。

── 紙の本には，視覚以外のところにも，たとえば肌触りやにおいといった情報もあります。

そうなんですよね。古い本はこんな字を使っていたとかこういう紙だったとか，実際に時間がたって古びている様子とか。そういうことも全て含んだ豊かな情報が，紙の本にはあります。書いてある内容だけが必要であれば，電子媒体ですごく便利に取り入れられるから，それはそれでいいのかなと思いますが，本はもうちょっと別のものになっていくのではないかなと思います。

── 本の定義がかわってくるということですね。

アメリカではブックアートというものが発達しているようです。アートスクールに本の課題があって，本を作りなさいと言われるのですけど，「あなたが本と思うんだったら何でもいいよ」という姿勢らしいです。だから，別にめくることができなくても，何でこれを本だと思うのか答えられれば何でもいい。

僕の作品は，そういうマニアックな分野の人達から見てもらっている感じがあって，海外の人と簡単につながれるので，面白いです。日本語しかない私のウェブサイトをみてメッセージをくれたり，来てくれたりもします。昨年はアメリカと中国からプライベートレッスンを受けに来てくれました。どんな国の人とも分け隔て無く交流してみたいですね。

── 最近はどんなものを製作されているのですか。

手帳やノートカバーをハードカバーの革装やアルミやアクリルで作ったりしています。うすい磁石でノート等を装着できるように工夫しています。（リブラギャラリー写真1）

── かっこいいし，実用的なのですね。

持ち歩いて実用するけどアートみたいでもあるもの。すごく使いやすいかどうかというと，たぶんそうでもない。ある意味使いにくくても，やっぱりこういうのがいいかなと思ってくれる人がいるような，実用品だかアートだかよく分からないものを作っていきたいですね。生活の中で使えるけど，ふと見るとちょっと非日常にうれしいという。

このノートカバーのアイデアの元になったのが，楽譜挟みというものです。友人のチェンバロ奏者に依頼されたのがきっかけで考えました。（リブラギャラリー写真2,3）

ピアノと違い，チェンバロでは譜面立てが楽器本体の上にあり，しかも板状ではなく格子状や柵状になっていることが多く，お客さんから譜面の裏が見えてしまうのです。本体の表面や蓋を開いたところに絵が描かれているという装飾的な楽器だからこそ，楽譜だけ何か適当なものに挟んで持っていくのが嫌だということでした。

── デザイン性のあるものを求められたのですね。

そうですね。ただ，デザイン性だけではなく機能も求められました。革製だと音が全然通らないということで，音が透けるように穴開きのアルミ板の両面に別のデザインの穴を切りぬいた革をはりました。いろいろな素材を使ってみるのが好きなので，革なら牛や豚，山羊だけでなく，らくだやヘビ，そして和紙も組み合わせて作ったことがあります。

── 今後はどういった活動をされるのでしょうか。

依頼が来たら対応するというスタイルはたぶん変わりませんが，自由な発想でいろいろ作ってもらうワークショップができたらいいかなと。

「だめ」と言わないようにしています。面白い発想が出てきて，とても楽しいし，明日への活力になっているように感じます。

山崎　曜

僕は決められたとおりをやるのがすごく嫌なのです。あれはだめ，これはだめ，こういうふうにやりなさい，正解はこれです，ということが多い教育を受けてきて，それがいやになって，美術大学に進学しました。しかし，そこでも結局は，これがよくて，あれがだめ，というのは同じでした。それが窮屈で，嫌で，何かの権威の基準で測られないように，どこにもハマらない自分だけの分野を作ったのだと思います。

今まで20年ぐらい教室をやってきましたが，「だめ」と言わないようにしています。そうすると，いろいろな，面白い発想が生徒さんから出てきて，とても楽しいし生徒さんの息抜きや明日への活力になっているように感じていました。

こんな教室なのですが，最近は，来てくださる方の疲れ具合が気になることもあります。今の社会は働きづらそうだなあとか，この年代はいろいろあって大変だ，と感じたりもします。教育関係の人とオンラインのミーティングで知り合う機会があり，学校の閉塞感のひどさも聞きました。もう工業的大量生産に対応する人材を育てている時代じゃないのに，現状では学校がそこにうまく対応できていないみたいです。

── 働き方も変わってきていますね。

僕が昔会社を辞めたとき，平日の昼間に新宿とかをふらふらしているのにかなり抵抗があって，こんなことをしていていいのかな，って後ろめたく思っていたのです。でも，だんだん慣れてきて，時間が空いているときにいろいろなところに行くことができて便利だな，と思うように変わりました。

また，ある時期から，靴がすごく嫌いになってしまいました。足は1人1人ちがう形なのに，既製品の靴に嵌めなければならないから，靴選びは大変です。あるいはオーダーメイドで作ったとしても，お金も手間もかかる。だったら草履でいいんじゃないかな，と思いました。草履だと外側がないから誰が履いても困らないし，日本は高温多湿だから草履がいいに決まっているなとか，自分本位に考えるようになりました。冬は地下足袋もお気に入りです。

そういった身近なことを変えてゆくと，感じられるものが増えてきました。ぎゅっとしたものの中に入れられていると，不快とかをあんまり感じないように自分を制御して，これでも大丈夫というふうに思い込むようになり，そうして，どんどん感覚が鈍くなってしまっていたことに気づいたのです。

その制御や思い込みをやめていったら，だんだん「あれ，これもちょっとおかしいかも」とか，「こっちの方がいいかな」とか，感じられるようになってきました。

今後，僕がやっている「自由に考えて自由に作る」ということが活かせる場があるかもしれない。そういうワークショップをやっていきたいですね。

プロフィール　やまざき・よう
1962年生まれ，東京都出身。製本アーティスト。東京藝術大学デザイン科卒。出版社勤務の後，工芸製本の見習いをして，製本技術を身につけた。「手で作る本の教室」を開設して製本技術や身近なものづくりを教えるとともに，定期的に個展を開催している。著書に，「手で作る本」「もっと自由に！手で作る本と箱」（ともに文化出版局刊）がある。ウェブサイト yoyamazaki.jp